

末黒野

すぐろの



10月号

(通巻890号)

山 氣

森 清 堯

万緑や鳥語人語に耳澄まし
結葉や先頭の背を見失ひ
梅雨めくや暁の鴉のしきりなる
花茄子や浦に段なすほまち畑
滝音のなほ高めある山気かな
出会ひには手を上ぐるのみ梅雨曇
揺らぎたる気力体力梅雨じめり
夏萩や苞を両手の帰り道
がれの場をやつと抜くれば草いきれ
虎杖の花や眼下の青き湖
連れ合ひのうなづくばかり軒風鈴
阿夫利嶺を抑へ込むやう雲の峰

瑞声

河鹿笛

黒滝志麻子

(顧問)

水音の折れゆく道や夏帽子
風を呼び風を朶みて夏柳
矢印を頼り涼しき地下の道
樹下涼し流るる水の軽き音
大山をまるごと洗ふ夕立かな
筆措けば河鹿笛湧く渡瀬より
寺の井の蓋の青竹ほととぎす
封緘の糊なめらかや夜の秋

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



異人館

森清信子

俄か雨夏鶯のおどけ鳴き
当たり前の暮し貴し茄子の花
夏座敷白身魚の薄造り
異人館の歳月あらは蔦青葉
老鶯や榊捧ぐる喪の静寂
又と言ひてもう会へぬ人梅雨寒し
昏れ残るくちなしの花錆ぬまま
口きかぬ一日の長し梅雨鴉
雨後の坂に足とられさうほととぎす
コートよりドリブルの音梅雨晴間

青田

石黒興平

大仰に風に応ふや今年竹
父の日やマンゴー切つておもたせに
言ひ過ぎの悔いを呑み込み冷奴
生き生きと命ひしめく夏野かな
梅雨の駅傘の絵柄を見て飽かず
沈黙の重きに開く扇子かな
風の形見ゆる青田となりにけり
天網の破れむばかりはた神
宿下駄のゆるき鼻緒や夕河鹿
水母浮く意志のある如く無き如く

雛僧

岡野里子

白花の秘めたる紅や貌佳草
海光に赤き葵や沖繩忌
芙美子忌や色めく朝の七変化
灯を消して透くる憂世や青簾
寺庭の敷砂利白し濃紫陽花
晚鐘を撞く雛僧や百日紅
里山の雨後の笹やほととぎす
石垣は野面積なり合歡の花
雲走る夏草の丘歩兵の碑
手付かざる宅地造成草いきれ

五月闇

菅野日出子

大夕焼みなどみらいの観覧車
古民家の土間を吹き抜け梅雨の風
寺領より通夜の気配や梅雨の雷
総持寺の伽藍に一人梅雨の冷
明け易やとりとめの無き夢消えて
大雨の被災地憂ひ五月闇
川添ひの道をせばめて濃紫陽花
昨夜雨の雫玉なす額の花
本堂へ続く裏道苔の花
夫の忌や火頭窓より黒揚羽

忍冬

田中臥石

波郷師を辿る梅雨入の南白亀川
葎切の波郷の声す南白亀川
老鶯の訝海透く松林
潮騒を鎮めて暗し走り梅雨
忍冬波郷の弟子で生きてをり
ウイルス禍の無き青山の地や浜木綿
子燕のすいと頭上を宙返り
アカシアの花の崖より鳶舞へり
海ひびく青田の径を郵便夫
花合歓や東京捨てて五十年

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



涼し 高木邦雄

万緑や始業のチャイム大空へ
夕さりの回廊涼し建長寺
江ノ電の窓を抜くるや若葉風
梅雨寒の紅茶に和む夕べかな
雨意兆す風の匂ひや青簾
黙深き谷の吊り橋夏薊
雲間より日の差す古刹苔青し

鳴子百合 堺昌子

帰省の子 長尾タイ

町騒がし遠出の出来ぬ五月晴
湿原の静寂を深め深山蟬
白樺の林明るし花さびた
百日草庭片隅に盛りなる
ひよつこりと子の訪ね来ぬ夏の宵
公園の人影まばら鳴子百合
夏空や雲一朵なき八ヶ岳

鯨捌く心の憂さを叩きけり
軒しづくの調べの涼し昨夜の雨
築地塀洩れ来る琴の音涼し
西瓜割る一人に余る至福かな
足伸ばす一番風呂の帰省の子
日焼顔鼻筋通る女の子
蟻地獄突く少年反抗期

梅雨入 今村千年

歳時記の頁の線りも梅雨入かな
陋屋の畳の湿り梅雨に入る
阿夫利嶺に雨の気配や濃紫陽花
蒼天を貫いてをり樟若葉
ふるさとの枝折戸濡らし夏の雨
青田波果ての近江の海の波
出棺へ琵琶湖のうたや夏花摘

甥の早世を悼む

梅雨の星 及川照子

微笑みのブロンズ像や梅雨晴間
病める身の心に灯る梅雨の星
滴りに日差し一筋山の径
眼裏の穂高の峯や星涼し
玉虫の彩は失せず桐筆筈
昼寝覚め夢に心を奪はれて
老ゆる身にぼうたんの緋のまぶしめり

水馬 大川暉美

朝顔の双葉にふるる風やさし
草を飛び草へ消えゆき雨蛙
葉脈の著きを栞り楷青葉
碑の読めぬ擦れ字青葉闇
水馬や雲影追つて四肢張つて
山よりの風の生まるる涼夜かな
茗荷の子刻む香りや夕厨

山女 太田良一

ばらばらに散つておさらば走り梅雨
片雲の育つ隙間や梅雨晴間
杉の香や地酒を脇に山女焼く
爆音を吸ひ込む荒地メロンの香
山女焼き浮世の憂さを食ひにけり
端居して孤高の人を演じけり
峰雲やズボンの腰のワンカップ

翠 巒 岡田史女

筋トレの片足立や半夏生
鑿打つ音のひびくや夏木立
雲間より日のこぼれきぬ蓮の花
鯉の尾の水切る力未草
虎尾草や尾根へと続く石畳
翠巒を抜けて鶯老いを鳴く
サツチモを聞きつつ寝入る夜の涼し

尊 舟 加藤静江

犬の吠ゆ芒種の月の明るさに
尊舟沼は静かに雨を受く
老鶯の離す一山雨催
郭公の甲高き声風の中
夏草や乾ききつたる大水車
兄逝きて夏の河原の深閑と
あぢさゐの青さを極め杜の雨

マリオネット 小田嶋野笛

交通事故 斉藤マキ子

夏陰や電車ここより単線に
蓮咲いて七堂伽藍しづもりぬ
ユツカ咲き人寄り難き研究所
天瓜粉にまみれ長寿の血筋とや
糸切るるマリオネットのごと端居
雑用に倦み冷房の本屋まで
後ろ手に探るハンカチ帯の中

明易し外科病棟におらぶ声
身に合はぬ病衣昼寝を貧しくす
寝たきりの肩こりありぬ夏の月
寝たままのラジオ体操冷房裡
病食の冷さうめんや音たてて
生きんかな車椅子漕ぐ玉の汗
リハビリに自主トレ時間夏の雲

青炎集

森清 堯選



横浜 横路尚子

軽鼻の子の自由奔放水脈の綾
一夜城の名残の巨石夏薊
石垣の崩るるままや木下闇
荒梅雨や中洲の草に残る塵
ゲームする男の子の項玉の汗
水輪広げ翡翠の長きホバリング

横浜 前原マチ

鰐口のくぐもる音や梅雨に入る
陸橋に傘のおちよこや青嵐
万緑や白衣観音丘に立ち
荒梅雨の叩く祠やトタン屋根
巣箱置く池の中洲や日々草
涼しさや魚の刺繍のマスクの子

川崎 滋野 暁

憂きことは言はぬ卯の花曇かな
自転車を押して坂道桜の実
枇杷食むやつるりすると種四つ
閉店のセールのシャツを半夏生
街川に残る甌穴夏燕
手遊びの扇の骨のほつれかな

横浜 石川博臣

十字切る花に寄りそひ梅雨の蝶
花も樹も人も黙して梅雨の雲
ゆきくれてなほゆきくれて額の花
めまとひのいくどさまたぐ別れ道
筒鳥の啼く方へ逝くあかね雲
無言館の人語らざり夏木立

大網白里 亀卦川菊枝

青梅を滑る光や雨上がる
荒梅雨や傘をはみ出るランドセル
今年竹日の斑の遊ぶ墳墓の地
目交ひの田を閉ざす霪夏の暁
雨の日の折鶴あそび合歡の花
炎天やいつもの道の倍遠し

横浜 梅田 武

新じやがと一言嬉し煮ころがし
しんみりと傘の重たき梅雨入かな
忍耐のウイルス籠り梅雨籠り
海を見ず山を見ずして夏果つる
白糸のもつれか烏瓜の花
一夜酒共に八十路の寛ぎに

横浜 東小園美千代

朝日影未央柳の蕊光り
翻る真白きシート青葉風
軒先の梶子の香や雨しづく
軽鴨の子の浮きたつ八羽漣引きて
梅霖や梵鐘の音のくぐもれる
手水鉢の水あふれをり送り梅雨

横浜 龍 町子

医通ひの足の重たし半夏生
騒めける店の片隅梅雨の傘
農夫の来くちなは二匹ぶらさげて
二番子の大合唱や夏つばめ
礎の百千の名や沖縄忌
風の日の茅の輪くぐりや手を借りて

横浜 高橋正江

噴水の止む一瞬の静寂かな
沿線に並ぶ四葩や雨しづく
梅雨晴や白球響く河川敷
風吹けば風切る音や青芒
思春期の少年の黙梅雨寒し
風鈴の軽き音を生み風の息

横浜 小山ほ子

梅雨月の櫂の上に潤みけり
梅雨晴や白雲写す潦
雨乞のてるてるばうず御酒を添へ
香木をくゆらす端居織部窓
紫陽花の彩泳がせて水鏡
琅玕の結界の奥杜若

耕 土 集

岡野 里子



塩焼きのちぬ海の漢の顔が食ふ
南風荒れ竹林歪む安房の国
青大将日向恋ふかに遊歩道
騒雨来てなにやら聞こゆ大鳥居
静けさに耳鳴り覚ゆ星の恋

横浜 伊藤 鴉

黒南風や湧き水響くはけの道
ざり蟹を釣り上ぐる糸次々と
さくらんぼ一粒ごとに浮かむ笑み
一番に体温計りピアガーデン
故郷に警報の出つ半夏生

川崎 木村 純子

花石榴燃ゆる往時の恋の色
雲重く早もじとじと六月来
昼顔や小さき幸せ足元に
蓮池や微かの風の香りして
風知草わづかの風もうけとめて

横浜 白居 澄子

掌に縋る蛍のひかりかな
料亭は森の只中蛍とぶ
池の辺の闇深ぶかと暮鳴けり
鉢に舞ふ鷺草の風やんはりと
みはるかす湖面限りの大夕焼

横浜 与田 幸江

新茶汲む香りを色を併せ汲む
猫額の畑や溢るる夏の蝶
世の中を斜めに構へサングラス
梅雨寒し細る発想しぼり出す
ペダル急ぐ背を撃たるる炎天下

茅ヶ崎 嘉味田 朝

水芭蕉山のあなたの雲垂れて
なにもかも瞋りだしたる青嵐
ふじつばや梅雨の最中の舳ひ船
吊り橋や星降るごとく河鹿笛
ぞろぞろと娑婆に繰り出づ子かまきり

横浜 小林 拓路

夫の背をしばしば見遣りわらび狩
いづくにも広き空あり青田波
梅雨晴間ぐいと迫れる佐渡島
風鈴を吊して嫁の帰りけり
無駄花の黄色輝く南瓜かな

新潟 太田チエ子

雲の峰背に家路のもどかしく
雨に散る薔薇や極まる真紅
夏書すや考妣へ告ぐる令和の禍
長雨の後の初声油蟬
自販機に残る葉縮み夏大根

横浜 佐藤 勝代

病む母へ今日も絵葉書梅雨曇
掛軸を揺らす庭風夏座敷
王詰むる高き駒音日雷
賽銭箱の脇に置かるる蚊遣かな
冷麦の薬味たつぷりガラス鉢

横浜 大庭美智代

藍尽くし剪らるる四葩卓の壺
十萬円の思はぬ受給鰻食ふ
山脈を覆ひ隠すや梅雨の雲
明易や雨音著き旅の宿
如何なるや作句の続き昼寝覚め

横浜 宮崎他異雅

立葵わらぶき屋根を借景に
ぱらぱらと雨の波紋や水澄し
古里の麦茶の香りかへがたし
波音の浜の宿なる寝莫座かな
入れ食ひの呵々大笑や夏海

横浜 杉山 善信

ウイルス禍古茶一服に慎める
亡き夫の書籍や紙魚の走りたる
天心へ疫病払ひの花火かな
遠き日の考の面影パナマ帽
初めての白き胞子や軒忍

横浜 佐々木澄子

まばゆさの白のつと立つ海芋かな
夏の朝青き心をうつす湖
大事なるもの見ゆる夏ウイルス禍
花合歡は夜のぼんぼり森眠り
顔寄する線香花火小さき手

横浜 久島しんの

温度計の鰻上りの立夏かな
新緑の森へ散歩や小半時
床の間の一輪挿しや額の花
隙間より入りたる砂塵青嵐
電柱の細き日陰や一人分

横浜 杉山くみ子